

Title	古代の基礎的認識語と敬語の研究
Author(s)	吉野, 政治
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/11094/2201
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	よし の まさ はる 吉 野 政 治
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 19058 号
学位授与年月日	平成 16 年 11 月 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	古代の基礎的認識語と敬語の研究
論文審査委員	(主査) 教授 蜂矢 真郷 (副査) 教授 後藤 昭雄 教授 金水 敏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古代日本語における、「基礎的認識語」と敬語とについて、国語学的に研究するものである。ここに「基礎的認識語」とは「理由」・「領域」・「時空間」等を表す語を指している。

第一篇「基礎的認識語の研究」は、第一章「理由の認識」、第二章「領域の認識」、第三章「時空間の認識」からなり、第二篇「敬語の研究」は、第一章「敬語補助動詞の成立」、第二章「敬字の成立—「御」と「奉」—」からなる。冒頭に「はじめに」を、末尾に「あとがき」を付す。(400字詰換算約 900 枚)

第一篇は、理由を表すタメ・ユエ・カラや、領域を表すマ(間)や、時空間を表すト・ホト(程)・トコ(常)・トキ(時)およびアヒダ(間)などについて述べる。

「理由」を表すタメ・ユエ・カラの差違について、タメは、近年「目的」を表すとされるが、「目的」と「原因」を包括する「理由」を表すものとして新たにとらえ直し、未実現・未完了の事柄を理由とする場合にはタメが、既に存在し確定している事柄を表す場合には、ユエ・カラが用いられて、ユエは〈外なるもの〉を、カラは〈内なるもの〉を理由とする場合に用いられる、と改めて述べている。

マ(間)は、二つのコト・モノの間にある程度の時間・空間的空白がある「空白のマ」と、ある程度の量で一つのコト・モノが継続して存在する「継続のマ」とがあるとする。

トには、上代特殊仮名遣によるト(甲類)とト(乙類)の区別があるが、前者は、狭い空間、短い時間を表し、ホト(程)やミナトなどとの関連を持つものであること、後者は、開かれた空間、長い時間を表し、ト(常)・トコ(常)、トキ(時)との関連を持つものであることなどについて述べる。

第二篇は、補助動詞マス(イマス)・タマフ、敬字「御」・「奉」について述べる。

補助動詞マス(イマス)・タマフの用法の差違について検討し、また、移動動詞に下接する場合などについて見て補助動詞の成立過程をたどっている。

「御」は、中国漢詩文において馬を使う意ないし侍る意が原義と見られるが、日本で尊敬語として用いられるようになり、また、「奉」は、同じく献上する意ないし受ける意が原義と見られるが、日本で謙讓語として用いられるようになるという、それぞれの過程について述べている。

論文審査の結果の要旨

古代日本語の研究は、資料の少ないことを始めとして困難なことが多い。そうした中で、本論文は、先行研究をよく検討した上で、種々の新たなとらえ方を示しているものである。中には旧説に戻るように見えるものもあるが、よく見れば新旧の説を踏まえた新しい解釈を施したものであると言える。

タメ・ユエ・カラを「理由」を表すものとし、それぞれの差違を未実現・既実現や〈外〉・〈内〉という観点からとらえ直すこと、マ（間）について「空白のマ」・「継続のマ」とを区別して解釈すること、ト（甲類）・ト（乙類）の差違を意味的にとらえてそれぞれについて述べることなどは、いずれも新旧の説を検討した上での新しいとらえ方である。

マス（イマス）とタマフの用法の差違について述べることは、先行研究をよく見た上での、一つの方向を示したものである。

また、「敬字」の「御」・「奉」についての考察は、他の部分が和語についての考察であるのに対して、漢字表記された中国漢詩文や日本正格漢詩文・記録体などを研究対象としている点で注意されるものであるが、中国と日本との差違ないし和化の過程をよく示していて、今後の研究の大きな手がかりとなると見られるものである。

また、多くは、付論を加えて、それぞれに関連する問題についてもよく目を配っている。

このように、先行研究をよく検討した上での新たなとらえ方を多くしている点に、本論文の最も大きな価値があると考えられる。

一方で、「基本的認識語」と敬語とを総合的にとらえようとする観点には未だ弱いところがあり、最後に全体のまとめがほしいところである。本論文にふれられていない「基礎的認識語」や敬語の考察は、今後追究して行かなければならないであろう。また、個別の語構成の解釈には説得力の薄いものもないではない。

しかしながら、本論文は、困難な古代日本語の研究の中で、種々の新たなとらえ方を示すものとして、評価できる点を多く持つものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。